

平成28年11月17日(木)

老球の細道284号

チームワークがあらわれるディフェンス

会津バスケットボール協会 室井 富仁

ゲームには出場できないが常にベンチで声をかける選手がどこのチームにもいると思う。特に、チームが劣勢になって誰もが意気消沈の状態にある時、声を出し続ける選手は本物である。このような「For the Team」を常に意識している選手をたくさん持つチーム、コーチは幸いである。

「チーム(Team)」とは何か。アメリカのあるコーチが英語の語呂合わせで下記のような説明をしている。シンプルな考えで、まさに御意。

T・・・Together (一緒にがんばろう)

E・・・Everyone (1人ではむずかしいのでみんなでやろう)

A・・・Achievement (目標達成に向けて)

M・・・More (今よりもさらに向上するために)

要するに、「優勝という目標達成に向けてみんなで力を合わせ、今よりさらに向上するために一緒にがんばろう」という雰囲気のある集団を「チームX(チーム会津)」という。チームXが一丸となって大きな目標に立ち向かうとき「チームワーク」が問われる。バスケットボールにおいてはディフェンスにおいてチームワークの真価が問われる。

アメリカのラサール大学ヘッドコーチ・ジョン・ジアニーニの著書『バスケットボールのコートセンス』(大修館書店)によると、ディフェンスのチームとしてのまとめ(チームワーク)を示す状況を四つあげている。シェルディフェンスをイメージしてほしい。

一つめは、オフェンスのボールが動くときはいつでも、ディフェンスは適切なポジションに向かってボールとともに動く、ということである。これは“エアertime”と呼ばれる。ボールが空中にある間、ディフェンダーは新しいディフェンスのポジションに動いていなければならない。

二つめは、適切なポジションにいるという目的はヘルプに備えることができるということである。優れた、チームワークのあるディフェンスを定義するなら、誰かが抜かれてしまったとき、他のディフェンダーがイージーなシュートをさせないようにすぐヘルプすることである。

三つめは、ヘルプのときはいつでも、他の選手はそのヘルプした選手をカバーするためにローテーションし、バスケットから一番遠い位置のオフェンスだけをオープンにする、ということである。

四つめは、チームは素早くリカバーしなければならない。ヘルプやローテーションの直後、すぐに自分のマークマンのディフェンスに戻らなければならない。リカバーにはどんな空いた隙間も埋めようとするディフェンス全体の意欲と決意ばかりでなく、コート内の状況をよくわかっていることが必要となる。

「オフェンスは個人で、ディフェンスはチームで」とよく言われる。ディフェンスは一人の弱さをみんなでカバーするところに真骨頂がある。しかし一方では、たった一人のディフェンダーのわがままやサボり、そしてミスやエラーが相手の得点に結びついてしまうこともある。「TEAM」という字に「I(私)」はないが「愛」は必要だ。